

風と光と緑そして子ども達

——個性を生かす教育——

足利市立小俣第二小学校 塩 島 誠

はじめに

平成元年度若手教員海外派遣・アジア・オセアニア団の一員として研修の機会を与えられた。この研修が他の研修と大きく異なるのは、全日程が60日間という長期のものであることと、約1か月はたった一人でホームステイをしながら学校研修を行うことである。

そこで、今回の研修の機会を契機に、オーストラリアという新たな視点から私自身がかかえる課題について見直してみようと考えた。それは次のようなことである。

現在、「個性を生かす教育」ということが重視され、学校教育の現場でも個に応じた指導の在り方等の実践研究が多くなされている。しかし、個性を生かすということが、基礎学力を身につけさせるための個別教育というような面に偏ってはいないだろうか。個性を生かすとはどういうことなのかその実際にについて研修を進めたいと考えたのである。

また、教育を支える背景として、オーストラリアの風土・生活一般などについて家庭滞在により知ったこと、体験したことを見たまま、感じたまま率直に書き表わしたい。

なお、研修はオーストラリア、タイ、シンガポールで行われたが、主研修地のオーストラリアについてのみの報告としたい。

I オーストラリアの風土・生活

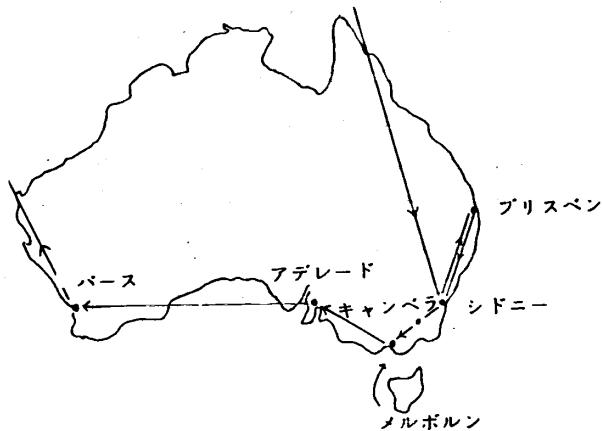
暗やみに知るオーストラリアの広さ

とにかく広い国である。日本の20倍以上の面積である。研修地はシドニーからオーストラリア第3の都市ブリスベンへ。

1か月後には首都キャンベラへ。その後メルボルンを経てアデレード、パースへと進める予定であったが、航空会社のパイロットのストライキにより大きく変更となった。ストはすでに1か月も続いていたのである。

ブリスベンとシドニー間は順調で約1

時間のフライトであった。しかし、シドニーからキャンベラまでは飛行機がないと言われた。ツーリストの現地スタッフも大わらわで走り回っていた。我々もどうすることもできず、ただ祈るばかりであった。結果的には団が3つに分かれて、乗員7・8名程度の小型軽飛行機、小型の軍用機、バスでキャンベラに向かった。



研修の行程図

私はバスで他の4人の団員とキャンベラに向かうことになった。午後4時過ぎにシドニーを出てひたすら道路を走った。地図で見るほんのわずかである。高速道路を走るがライトの明りは我々の乗っているバスのものだけである。後ろをふり返ると暗闇で何も見えない。車が故障すると死につながることもあると言われているのを思い出した。もっともだと思った。寒くて震えが止まらない。新聞紙をかぶる。なかなかキャンベラの灯りが見えてこない。飛行機ならば1時間もかかる距離であるが、車で何時間も走っている。やっと地図の縮尺の違いに気づいた。オーストラリアは日本の20倍以上の面積がある。同縮尺でオーストラリアを描くととてもない大きな地図になってしまうのである。広さを思わぬ所と時に実感できた。

雰囲気の違うそれぞれの都市

シドニー、ブリスベン、キャンベラ、メルボルン、アデレード、パースと大都市を移動して、街の雰囲気がそれぞれ異なっていることに気づいた。



フェリーから望むオペラハウス

シドニーは、政治・商業中心の都市との感じを強く受けた。街を歩くとともにかく銀行が目についた。郊外に出ると青い空、緑の樹木、そして赤茶色の屋根。景観を大切にしているのがよく分かった。

エスカレータに乗って何か日本と違うと感じたのは、ほとんどの人が右側に立っていたことであった。片側は急ぐ人のために空けておくときいたことを思い出した。

ブリスベンは開放的な街であった。北半球と南半球の違いはあるが沖縄とほぼ同緯度である。クイーンズランドの州都であるが落ち着ける街であった。きらめく陽光と青空、そしてゴールドコーストへの玄関口でもある。

キャンベラは、首都であり政治・経済等の中心である。官庁街でもあり人工的に造られたということからかもしれないが、あまり生活臭が感じられなかった。

メルボルンは、ヨーロッパ的な建物が多く、イギリス色の強い街との印象であった。バスの中から見かけたのであるが、判事がテレビ映画そのままのようなかつらを着けて足早に歩いていた。ブリスベンでは半そでであったが、メルボルンではセーターを買い求めなければならなかった。

パースは、世界で最も美しい街の一つと言われている。確かにそのとおりだと痛感した。何しろ空気は澄み、水が青いのである。空の青さがそのまま映り、スワン河のゆるやかな流れと一体になっている。時間がゆっくり過ぎていく街のようであった。

オペラハウスは大人の世界

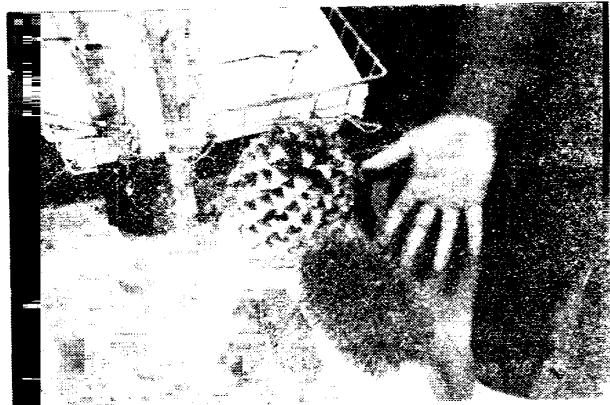
シドニーに着いてその日のうちにオペラハウスに行った。幸いなことに、オーストラリア空軍のブラスバンド公演を聴くことができた。聴衆は空軍ファンと家族、軍関係者といったところ

ろである。日本では必ずといってよいほど小さい子どもの姿が見られるが、ここでは見つけられなかった。ドレス姿の女性が目立った。

オープニングは国歌である。全員が立ち上がり歌う。異国を感じた瞬間であった。ブラスバンドをバックにオペラ歌手が歌う。すごい迫力である。司会者がユーモアたっぷりに解説したり、おしゃべりをしていた。意味は分からなかったが、楽しむために今この時があるということを感じた。ホテルへの道すがら、9月の早春の夜気に背を丸め思わず「大人の時間だった。」と変に感心してしまっていた。

パイナップルにあらず！

オーストラリアでは松ぼっくりの大きさに驚かされた。大人の握りこぶし大の物が落ちているのである。大きいものになると子どもの頭ぐらいはあるらしい。樹木の種も大きい。歩道に黒い物がたくさん落ちていたので拾ってみると、長さ10cmはある種であった。50セントコインの大きさと重さなどは取るに足りないものと思い知らされたものである。



大きな木の実

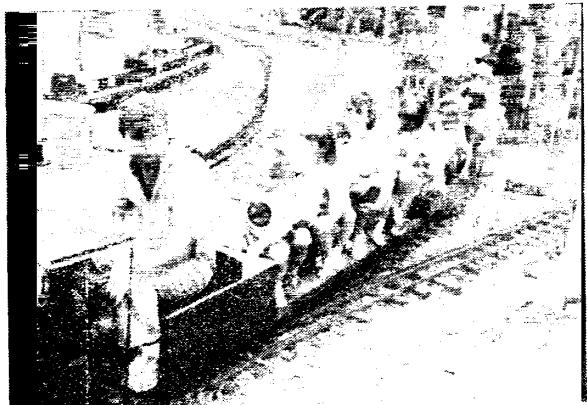
スチームエンジン

趣味の世界のこととはいえばスケールの大きさにはショックであった。なにしろ7年も8年もかけて模型の蒸気機関車を作り、同好の人々がお金出し合って土地を借り、労力奉仕で荒れ地にレールを敷き、トンネルや鉄橋を作ったそうである。そして休日にはサービスで子ども達を乗せて走るのである。簡単な売店も会員で作り、運営しているとのことであった。

学校研修でお世話になった校長のジョン・ニューウェル氏に案内してもらった。彼も会員であり、現在製作中との話であった。自分達のしていることに誇りを持ち、生き生きと語る彼の姿が印象的であった。

離婚と子ども達

「パードン」と思わず聞き返した。キャシー(ケンモア小の7年生)の話によると、彼女には両親が離婚しそれぞれ再婚したので、パパが2人のママが2人いるということであった。月に一度は前のパパの所へ遊びに行くと話していたが、その表情は明るく、日常の何気ない会話をしているようであった。そのうち「私もそうよ」と言ってくる子もあり、また、「彼女もそ



スチームエンジンを楽しむ人々

うよ」と話が展開した。オーストラリアでは離婚率は30%以上であり、夫婦がうまくいかないと感じたらお互いにあっけないくらい早く別れるということであった。私には離婚という問題がこれほど彼女ら(小学生の子ども達)にとって身近かで日常会話的なことに驚いた。と同時に、離婚が夫婦である二人(個と個)の問題であり、日本のように子どもの存在が大きく影響することはないと聞き、二重の驚きであった。

II 学校研修で学んだこと

1. 学校の概要

ケンモア小学校(州立)は、児童数350人程のやや小規模の学校である。小さい学校ということで教頭がいないが、校長以下担任の教師、音楽専科、ライブラリアン、ティーチャーズエイド(助手)等で31人である。クイーンズランド州では、小学校は1年生から7年生までであり、7年生が日本の6年生と同年齢である。学校区がないので保護者は学校を自由に選べ、行かせたい所へ通学させている。ケンモア小はブリスベンでも有名な学校の一つで、家庭の教育に対する意識は高いとのことであった。子ども達は歩いて登校するもの、自転車やバスを利用するもの、自家用車で送ってもらうものと多様である。授業は朝9時から午後3時までである。10時30分から11時までがモーニングティーで、子ども達は家から持て来たスナックやタックショップ(学校の売店)で買ったものを食べたりする。教師もスタッフルームでティータイムである。忙しいときはミルクティー片手に教室へ行き、机に腰をかけて子ども達の前でも堂々と？飲んでいた。



ケンモア小の子ども達

12時45分から1時30分までがランチタイムである。

ほとんどの子ども達は外で腰を降ろしサンテドウィッチを食べたりしている。時間表は各教師が担任の裁量の範囲で作成しており、授業時間は45分と限らず30分単位のものもあれば60分続けるものもあった。学年が同じであっても担任の考えで多少の違いが見られた。

教科書が無いので、ほとんどがワークシートのようなプリントを使っての授業である。そのための教材作りが大変で、児童数の割に教職員の多いのがうなずけた。クラスサイズは1クラス25名である。(ただし、4年以上は30名) 定員を越えると2クラスになるが、日本と異なり一方のクラスは隣接の学年とコンポジット(混合)クラスになるのである。実際にケンモア小では、1年生が23人で1クラス、1・2年生のコンポジットクラス(1年生5人、2年生15人)が1つ、2年生が20人で1クラスとなっていた。

学校への保護者の協力体制は素晴らしい、それはPC(ペアレンツ&シチズン)と呼ばれており一般市民も含まれている。校外学習のときはもちろんだが、普段の日でさえ教室で教師の補助を

行い、学習の遅れがちな子どもに勉強を教えていた。また、学校備品がPCによる寄付や売店の売上げなどにより整備されていくため、その活動は大変重要となっている。

学校と地域・社会とのつながりは深く、7年生の行うドラマ（卒業学年が上演するミュージカル）は地域の人々を招待しての発表会であり、また学校サイエンスの研究発表はショッピングセンターで行っていた。学校が外の社会と密接になっていることを強く感じた。

2. 社会科におけるカリキュラムの実際

クイーンズランド州の社会科カリキュラム（シラバス＆ガイドライン）は、社会科のねらい、目指す人間像、習得すべき知識・技能・態度、そして各学年の単元とその目標について述べている。ここでは学年のテーマについて列挙する。

- ・第1学年—家庭での生活
- ・第2学年—近所での生活
- ・第3学年—オーストラリアの生活
- ・第4学年—地域の学習
- ・第5学年—昔のオーストラリア
- ・第6学年—他の社会（オーストラリア以外の国）
- ・第7学年—現在のオーストラリア

上記のテーマにもとづいて学習が進められているが、問題解決を大切にすることに重きを置いている。

児童のアクティヴィティシートには、①何が問題か、

②いかに解決するか、③困難な点は何かを書きこむスペースが設けられている。もちろんこれは高学年用のシートであるが、自力で問題を解決する練習になっている。オーストラリアの広大な土地に生きる人々の必要性からか、インディペンデント（独立）ということが重視されている。

内容面では、時間的にも空間的にも同心円的に拡大されている。1・2年生の家庭、学校、近所の生活についての学習が3・4年生では地域へ広がり、5年生で歴史的な要素が加わり、6・7年生でより広い社会（国レベル）の学習となっている。

社会科のカリキュラムの大筋は上記のようであるが、実際には各学校において若干の修正が行われているとのことである。幸運にもそのカリキュラム検討委員会を参観することができた。クイーンズランド州のカリキュラム改訂委員1名とケンモア小の教師3名で資料をもとに話し合っていた。その資料はブリスベン西部の各地区ごとの宗教、出身国、言語、収入、職業等についての割合が記入されていた。多民族の住む国であるだけに困難な点も多いが、国際理解教育そのものが普段着で行われているのではないかと思った。この視点でシラバス（教授要目）を見直すと次のような項目があった。

『To develop attitudes, feelings and sensitivities』の項の下位目標に、他の人々へ



7年生のジャッキーたちと作品

の思いやりを身につけるというような内容があった。ここで言われている「他の人々」というのは、肌の色、言語、習慣、文化などの違う人々のことも含んでおり、他の国々の学習することでねらいを達成すると書かれていた。知識として他の国や生活などを知るだけではないのであった。国際理解教育については社会科でやっているとの校長の話が納得できた。

3. 授業の実際

授業では教科書を使わずに、ワークシートかアクティビティーブック(ワークブック)を利用している。ワークシートは教師の自作もあれば、教師用のテキストからの物も見られた。ほとんど毎時間プリントが用意されており、子ども達はそのプリントに書き込みをして完成させたり、色をぬりはさみで切ったりの作業をしていた。特に1・2年生の授業では色をぬる、はさみで切り取る、貼り付けるという作業が多く楽しそうであった。同じ内容のプリントであっても色の使い方、ぬり方などは一人一人が個性を發揮し、でき上がった作品は様々であった。子ども達は周りの様子を気にすることなく思い思いに色をぬっていた。教師もあれこれと指導することなく、質問に応じて助言する程度であった。

5年生の国語(英語)の授業では、リーディング、スペリング、コンプリヘンション(理解)、個人指導の4つに分かれての学習が見られた。リーディングは図書室から借りてきたテキスト(読み物)を利用していった。そのテキストは児童数用意されており、内容は読み易いものから高度なものへと段階的にシリーズでそろっていた。このリーディングのグループは、カセットの範読を聞くグループと子ども達が2人1組で読み合うグループになっていた。リーディング、スペリング、コンプリヘンションの3つのグループは等質の集団になっており、一単位時間内にローテーションが行われていた。個人指導は、外国から来た子ども達や遅進児のための個別指導の色合いが強かった。

ほとんどのクラスで自分の考えや調べたことを発表する時間が設けられた。クラスによってその方法は様々であるが、低学年では教師が進行役で子ども達は用意した題材(ニュース、自分の宝物など)について話をしていた。

1・2年生の国語の指導では、博物館で恐竜の見学をしてきたことを生かしての詩の授業が行われていた。D・I・N・O・S・A・U・R・Sの頭文字を使って、各自が思い思いの表現で詩を書いていた。誤った文字については教師がチェックしていたが、表現されたものについては赤ペンで修正(指導)するというようなことは見られなかった。

他の学習においても、学んだことを同じ様に表現させたり1つのものに集約させるようなま



リーディングをしている子ども達

とめ方は少なく、一人一人の個性が生かされた本人とのかかわりの深い表現のしかたであった。これまでに一人一人を生かした指導という名のもとで、いかに押しつけの教育をしてきたのだろうか。個に応じて分かるように教えることばかりに心を奪われ、個が生かされる表現をおろそかにしていなかっただろうか。

すべての子どもに同じであってほしいものと、そうあってほしくないものを見極めたい。

4. 教師と児童とのかかわり

先ず感じたことは、教師は学業を教えることが中心であり、教科の指導のとき以外はかかわりが少ないとということである。モーニングティーやランチタイムの休み時間は、当番制で数人の教師が子ども達の様子を見ていた。必要に応じて笛を使い食事をする場所について指導をしていたが、共遊の場面や一緒にランチを食べている姿は見かけなかった。

生徒指導という面において、好ましくない学習態度や生活態度について注意・指導は行うが、日本のような担任が大きくかかわっての指導は少ない。叱責は主に管理職が行うことになっている。この国のかい意味での分業制とでもいうのだろうか、それぞれの担当がはっきりしているようである。女の子はピアスをつけていたり、指輪、ブレスレット等をしている。低学年の男の子は自動車のおもちゃを持ってきていた。他人に迷惑をかけなければ個人の責任で自由であるということであろう。誰一人問題にしていなかった。

日本では今、登校拒否が大きな問題となっている。ケンモア小ではどうなのか校長に質問したところ、そのような事例はないとのことであった。登校拒否という問題行動が日本社会の特徴的なことなのかも知れない。もし理由なく長期に欠席をすると、保護者が警察に罰せられるというのである。国が違い文化の相違もあるのだろうが、子どものしつけ、教育に関しては家庭の比重が大きいということではないだろうか。学校にすべてをなどとは考えられないのではないかろうか。



担任(左)とボランティアによる指導

学習の遅れがちな子どもには個人指導の場面が見られるが、必要に応じて保護者へ連絡し、教室で子どもに教えてもらうようである。教育の機会は学校が提供するがその結果としての責任は受ける側が負うということなのであろう。学ぶことの厳しさがあるが、何か割り切れない思いがした。

「教育は人なり」と言われるように、学校においては教師と子ども達の人との触れ合いが重要だと思うのだが…。

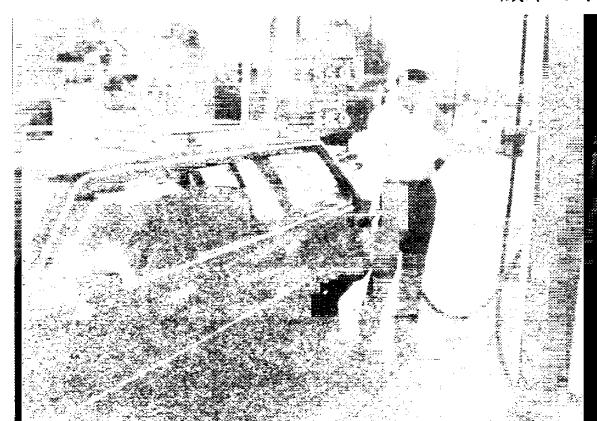
III ホームステイを通して学んだこと

家庭教育の基本的な考え方を知ろうとのめあてを持ってホームステイを行ったが、これは大変

難しいことであった。そこで、わずか4週間ほどの短い期間であったが、生活を共にして感じたこと不思議に思ったことなどを書き連ねたい。



アブセーリング中のケイ



ガソリンを入れるイアン

気づいた。そして夜は家族とともにゆっくりくつろぐためにあるとの考えを知ることができた。実際に、イアンは6時頃までに帰宅し、ケイが夕食の準備をするのを手伝っていた。食後は本を読んだり、テレビを見たりと夫婦の貴重なひとときであった。

日豪貿易摩擦？

夕食後はケイに英語を教えてもらったり、キャメロンと将棋をしたりした。デーヴィドとは将来のことを話したりもした。イアンとはヨットのことやアウトドアスポーツのことを話した。ある日、日本のことが話題になったので彼に日本についてどう思うか聞いてみた。日本の貿易

休日はアウトドアスポーツ

ブラウン家はイアン、ケイ、デーヴィド、キャメロンの4人家族である。イアンはエンジニア、ケイはパートタイムの教師、デーヴィド(17才)とキャメロン(15才)はプリスベンでも有名な私立学校の生徒である。土・日のホリデーはセーリング(ヨット)、サイクリング、アブセーリング(崖をロープを使って降りるスポーツ)などのアウトドアスポーツを楽しんでいた。家族で過ごす時間を大切にしており、用事がないかぎり皆で出かけるとのことである。私も初めてであったが、セーリングとアブセーリングを体験した。セーリングはランチタイム以外ずっと楽しんでいた。ランチといえば、生野菜(にんじん、セロリ)と冷たいただの水を思い出す。10センチくらいの長さのにんじん、セロリをバリバリかじり、サンドウィッチを食べ、そして冷蔵庫で冷やしてあった水を飲んだ。

ショッピングは午後5時まで

ホストマザーのケイに、「欲しい物があったら5時までに店に行きなさい」と言わされた。驚いたことに、5時過ぎには店が閉まってしまうというのである。買いそびれると、ジュースさえ飲めない。何しろ自動販売機がないのである。その上、商業地域と住宅地域がはっきり分かれているため車なしでは買い物も大変であった。しかししばらく生活するうちに、これまでの商業主義の生活にどっぷりと浸かっていた自分に

黒字が話題の中心となった。「日本は売るだけでなくもっとオーストラリアの肉を買ってほしい」と言った。ケイはほどほどにという表情で二人の方を見つめていた。自分が日本人であり、日本が宇宙船「地球号」の乗員であることを実感した。テレビ・ラジオなどのメディアを通しての訴えよりも、生活を共にした身近な人の一言は、心に響いた。

プラスチックは持ち帰り

学校研修中の昼食はケイが準備してくれた。イアンや子ども達もランチを持って行くので、ついでに私の分も用意してくれたのである。ランチボックスの中には、青りんご1こ、ラップ（プラスチックとケイは言っていたが）に包まれたサンドウィッチが入っていた。

ランチを渡されたときにラップを持ち帰るよう言われたのである。夕方持ち帰ると、ケイが洗ってまた使うと言ったのである。プラスチックは使った後の処理が大変なので（廃棄物としてはやっかいな物ということ）、できるだけ使わないようにしているとのことであった。そのために洗って再利用していたのであった。環境保全・保護を身近かなレベルで行っているのである。テレビで自然破壊のニュースを放送していると、私に分かりやすく説明してくれた。自然環境に対しての意識は高く、それを守ることに誇りを持っていた。

友達みたいな存在

長男のデーヴィドが父親のイアンについて言った言葉が、「友達みたい」である。確かにアブセーリングやセーリングを通して二人の子ども達と深く結びついているのを感じた。

さらに、セーリング仲間の会長としての行動や家庭においての父親（夫）としての役割を通して、一人の人間の行き方を子ども達に示しているように思えた。

イアンの後ろ姿は、私に多くの示唆を与えてくれた。



ブラウン家

おわりに

これまで内側からしか見ていなかったものを、外側から見ることができた。特に、「個性を生かす」ということについて、ケンモア小の学校研修で学ぶ点が多かった。

研修で学び、得た貴重な体験をもとに、私なりのまとめをしたい。

事 項	具 体 的 内 容
1. 個性を生かす、伸ばすということについて	<ul style="list-style-type: none"> ○ 同一性の要求と多様性の要求を見きわめること 個性は表現活動の中で生かされやすい。指導という名のもとに芽をつんでいなかっただろうか。また、理解したことを1つの方向(言葉)として表現させていなかっただろうか。拡散的思考の場があっただろうか。 ○ ワークシートは操作活動、問題解決のプロセスを十分に配慮して作成すること 低学年では、切る・貼る・色をぬるという活動が、高学年では、いかに問題を解決するか書くスペースが設けられたシートであった。
2. 国際理解教育について	<ul style="list-style-type: none"> ○ 社会科のカリキュラムへの位置づけを図ること 他民族国家であることから特に意識せずともに行われていたが、位置づけがしっかりされていた。
3. 学校・地域社会・家庭とのつながりについて	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校がすべてを担うのではなく、スポーツ面は地域、しつけ面は家庭と分担しあうこと それぞれの役割分担はあるが、人的交流は深く開かれた学校であった。
4. 教職員の充実について	<ul style="list-style-type: none"> ○ ティーチャーズエイド(助手)、パートタイムティーチャーの制度を充実させていること 教材の準備や校外学習の際にゆとりが見られた。また、休んだ教師の補充に、非常勤の教師を配当し学習指導の充実を図っていた。

上記のように、学校教育の面にしばってまとめてみたが、独断の域を出ていない。しかし、このオーストラリアでの研修をもとに、今後の教育実践に生かすべく努力し、再度見つめなおしをしていきたい。